

幕府最大の悩みは 財政悪化 意次は知恵を絞る

「賄賂まみれの汚れた老中」と揶揄されながらも、後世、その卓越した政治手腕で、「近代日本の先駆者」と称されるなど、評価を二分するのが、徳川九代將軍家重、十代將軍家治の二代に任せ「田沼の時代」を作った老中首座、田沼主殿頭意次である。

意次は享保四年（1719）、紀州藩士から旗本になった田沼意行の長男として江戸で生まれた。意行が徳川吉宗部屋住み時代の側近だったことから、吉宗の將軍就任にあたって幕臣となり、意次も紀州系幕臣の第二世代目として九代將軍家重の西丸小姓に抜擢。家重の死去後も世子・家治の信任を受け、側用人へと破竹

ためまおきつぐ●享保4年7月27日(1719年9月11日)～天明8年6月24日(1788年7月27日)。直參旗本600石の田沼意行の嫡男。9代家重、10代家治の信任厚く、小姓から側用人・老中格・老中と出世する。遠江相良藩初代藩主となり、知行5万7000石を得るが、家治死後に松平定信や11代將軍家斉の実父・一橋家斉の策謀もあって失脚。嫡男意知は暗殺され、他3人の子は養子に出されていたため、孫の龍助が陸奥1万石の大名として家督相続する。政策は本文にあるように進歩開明的であり、日本生まれでハーバード大学大学院出身の日本研究家ジョン・ホイットニー・ホールは、著書『Tanuma Okitsugu』(1955年刊)で「意次は近代日本の先駆者」と評した。



田沼様一つこれと
うっ?
何が望みじゃ
断定奉行にご推挙を
ふむ……!?
田沼様には増して賂を
うぬ!
僕を賄賂で
御政道を曲げる者と
侮ったか!!

面積の一割を農地化すれば六百万石の米の収穫が見込まれる。幕府直轄地からの石高は四百万石。つまり蝦夷地開発が成功すれば一・五倍の新田が獲得できるわけである。

加えて意次が着手したのが貿易の拡大だった。鎖国中だった幕府は長崎での貿易を独占。ただ、支払い(輸出)に充てる金や銀の流出が多くなり過ぎたことで貿易は縮小傾向にあった。そこで意次は輸出に従来の金銀でなく銅と海産物を充てることを考案。アワビやフカのひれ、ナマコなどの海産物は俵物とよばれ、高

の勢いで出世し、明和六年(1769)には老中格に昇進。そして、松平武元(平武元)に代わって老中首座になると数々の幕政改革を手がけ、権勢を握るようになる。

そんな意次が老中としてまず着手したのが、悪化する幕府の財政赤字を食い止めることだった。

五代將軍綱吉は元禄時代に家康が築いた財産を使い果たし、以降幕府の財政難は悪化の一途をたどっていた。財政とは言わずと知れた国や地

墓が語る 一大事

萬年山勝林寺

田村意次

田沼意次……
賄賂政治の首魁と蔑視されてきた人物である。だが、本当にそうであったか。

直木賞作家池波正太郎は『剣客商売』で、「政は汚れの中に真を見出すものだ」と書いた。

同じく直木賞作家佐藤雅美は『主殿の税 田沼意次の経済改革』で、「田沼は賄賂をとった。賄賂をこぼまなかった。(略)……力のない老中に贈られる量はすくない。力のある老中におおく贈られる。政治の世界は力の論理が支配している。清廉潔白だったかどうかは、うけとつた量の多寡ではおしはかれない」と現実的な見方を示した。

意次は失脚の後、私財を没収されたが、「塵二つ出ない」と言われたほど蓄財が見当たらなかった。賄賂とは程遠い。

田沼意次……
鎖国から開国を目指した幕閣。江戸時代において、この男は面白い。

級食材として清国に輸出できる。それらと引き換えに外国から金や銀を輸入すれば、幕府にとってまさに一挙兩得。結果、この改革は大成し、貿易が黒字に転換するのである。

さらには、鎖国中でありながら蘭学を推進、中国以外にもオランダ書籍を読むことを許可したことで、杉田玄白や前野良沢らによる『解体新書』が生まれることになる。

このような広い視野から大構想は、当時の諸大名や旗本たちにはとても思いもつかぬ施策だった。そして、この改革こそが意次最大の功績であり、一大事だったのである。

成り上がりの意次に 反田沼派が 策謀を巡らす

ところが、いつの世も改革には痛みが生じるものだ。

社会の資本主義化によって、町人や役人の生活が金銭中心のものとなり、贈賄が横行。都市部では町人文化が発展する一方、益の薄い農民たちは田畑を放棄。都市部へ流れ込み、農村の荒廃が生じてしまう。

さらに印旛沼運河工事の失敗や明和の大火、浅間山の大噴火などの災害による「天明の飢饉」(1782

方の支出と収入のこと。すなわち健全な財政とは政治に必要な支出に見合った収入がある

というところで、財政難

克服が、家治時代の幕府が抱える最大の政治課題だったわけである。

そこで意次が考えた収入獲得手段の一つが印旛沼と手賀沼の干拓だった。工事費用見積りは六百万両。

(88年)が疲弊した農村部を襲うのだった。

意次は対策を打ち出すものの事態は悪化するばかり。財政難に陥っていた諸藩は年貢の取立てを強化。それにより都市部の治安はさらに悪化し、一揆・打ち壊しが激化。それが従来、幕府の政治を担ってきた保守勢力には許し難い大罪となる。

反田沼派の中心人物が白河藩主・松平定信(まつだてのぶのぶ)だった。定信は八代將軍吉宗の孫、將軍になる権利を持つ田安家の三男として生まれたが、幕府の命令で白河藩・松平家の養子に出されてしまい、將軍になる権利を失っていた。そんな定信のもとに政権の外に追いやりられ不満をもっている名門大名たちが結集。やがて矛先は意次失脚へと向かうことになるのだ。

意次の長男で若年寄の田沼意知が江戸城内で暗殺され、意次を全面的に信頼してくれていた將軍家治の死が、それに追い打ちをかける。

策謀は首尾を遂げ 將軍家治死去で 意次失脚

家治の死去により後ろ盾を失った意次は二日後、老中を辞任させられ雁問詰に降格。大坂蔵屋敷の財産は



墓石に刻まれた碑銘。



萬年山勝林寺正門。現在は新本堂と納骨堂を建築工事中。

これを大坂と江戸の大商人に出資させ、完成した新田は出資した商人と地元民が分け合う。そうなれば経済も潤い幕府には年貢が入る。もう一つが蝦夷地(北海道)の開拓だった。

当時、アイヌとの交易で利益を得ていた松前藩は、彼らの農耕民属化を阻止するため長い間米作り禁止していた。だが、調べてみると耕地

没収され江戸屋敷も明け渡され贅居を命じられた。結局二年後の天明八年(1788)六月、意次は江戸で死去、七十歳だった。

意次の墓は東京・駒込の勝林寺にある。この寺は元和二年(1616)に御殿医中川元亨が開基、僧了堂を開山として湯島天神前に佛心寺として創建され、寺名を少林寺から勝林寺に改めたのち明治四十一年(1908)、この地へ移転されたという。

貿易黒字拡大のため、さらに貿易が出来る相手国を増やそうと次なる開国思想を描いていたとも言われる意次。だが、開国への道も意次失脚により泡と消えてしまった。

意次の死去から六五年後の嘉永元年(1853)、ペリーの来航によって強制的な形で開国が実現し、それが尊皇攘夷運動の呼び水となって幕府は崩壊へと導かれていく。

だが、田沼時代に幕府自らの力で開国に打って出ていたら、その後の日本の歴史は大きく変わっていたであろうことは間違いない。

そう考えると、意次にとって最大の敵は「松平定信」でも「反対勢力」でもなく、「彼が生きた時代」そのものだったと思えてならないのである。